

バシュユラール『瞬間の直観』の諸問題（1）

及川 馥

まえがき

断絶と連続、あるいは不連続の連続という考え方は、バシュユラールにおいて個人の生成から文化の形成まで一貫する大きな問題である。

前稿¹⁾において考察した接木というバシュユラールのひとつの思考装置も、フロイト的な欲動——この本能にかぎりなく接近するエネルギー源——を、できるだけ人間的で文化的な活動という高次元の活動まで誘導するために案出された図式であった。それはやがて文化コンプレックスという一種の偽似コンプレックスとして定型化されることになる。これは昇華作用と一言で片づけられるプロセスをバシュユラールが構造化したものだといえるであろう。もちろんこの文化コンプレックスも『火の精神分析』から始まって『水と夢』、『大気と夢』、『大地と意志の夢想』、『大地と休息の夢想』にいたる物質的想像力の研究においては有効であったが、やがて現象学的方法の採用とともに姿を消し、断絶の問題も後景にしりぞくのであるが、彼の前期の活動においては無視できない重要性をもっている。

バシュユラールの思想形成のなかでこの断絶の問題をふりかえってみるならば、『瞬間の直観』（一九三二）と『原

子論的直観』（一九三三）によって、時間と空間の意識における断絶を考察しており、『新しい科学的精神』（一九三四）で非ユークリッド的、非アリストテレス的、非デカルト的認識論を提唱する以前に、とくに時間論としては非ベルクソンの瞬間の概念を確立し、バシュラール自身の哲学の基礎を固めていたことが分るのである。

なおバシュラールの時間論にはほかに『持続の弁証法』（一九三六）があるが、ここではまず『瞬間の直観』をとり上げてその概要を検討することにしたい。⁽²⁾ というのも、本書はループネルの思想をもとにしており、さらに当時の大思想家ベルクソンの持続概念への批判もあり、意識の問題を数学や自然科学的視点まで導入して考察しているため、なかなか理解の困難なところが多いからである。

『瞬間の直観』には「ガストン・ループネル『シロエ』研究」という副題がついているように、ディジョン大学の同僚ループネル Roupnel（一八七一—一九四六）の『シロエ Siroe』（一九二七）についての研究であるが、序文で『シロエ』に対して讃辞を献げ、そこに流れている「この新しい直観に光をあて、この形而上学的関心を示す」ことがバシュラールの課題であると明示している。しかもループネルのこの本を要約するのではなく、発展させることが真の目的であると述べているように、『瞬間の直観』で述べられているループネルはバシュラールが共感をこめて変形したループネルであるともいえよう。「私は『シロエ』の諸直観をまったく自由に活用したので、結局ここにお見せするのは、客観的論文というよりも、『シロエ』についての私の経験である」（p.11）とバシュラールは明言している。

全体の構成は序文のあと、第一章 瞬間、第二章 習慣の問題と不連続な時間、第三章 進歩の観念と不連続な時間の直観、結論というふうになっている。

持続よりも瞬間を時間の本質と考え、連続よりも不連続に時間の特質を見ようとする態度がまずうかがえるであら

う。しかし習慣という反復の問題がどうして瞬間の不連続性とかかわるのか、さらに進歩という超越的な問題がなぜここに出現するのだろうか。目次を見ただけですでにいくつかの疑問が湧出するが、それについてはこれから答を見いだしていくことにしたい。まず瞬間からとりかろう。

I

本書の冒頭に「時間はたったひとつの實在、すなわち瞬間Instant⁴の實在 しかもちえない」というループネルの「決定的な形而上学的理念」(p.15)が示されている。やがてそれはループネルだけではなく、パシュラール自身の考えでもあることが判明するけれども、もうひとつの美しい比喩を引用しよう。

「時間とは瞬間の上に極限されそして二つの虚無のあいだに宙吊りにされた実^{レアリテ}在である。」(p.15)⁽⁴⁾

このイメージがまずきわめて空間的であることに注意しよう。時間は瞬間の上に極限されている。極限されたresertéeという語は「狭く限定された」という意味で「狭い谷間」という例が『プチ・ロベール』辞典に出ている。もうひとつの意味は「一層締めつけられる」状態をさし、もともとの動詞resserrerの締めつける、圧縮する、簡約にする、というような現代の意味を受けついでいる。時間がぎゅっと収縮したのが瞬間なのであろう。

なぜ時間が収縮するのだろうか。それは等間隔にきざまれる時計の時間ではないことは確かである。心理的な時間、あるいは形而上学的な時間なのであろうか。

さらにこの時間は二つの虚無のあいだに宙吊りになっている。宙吊りされたsuspendueとはsuspendreの過去分詞であり、文章語として「中断される、一時停止される」という意味があって、「会議中断、休会」という例が見える。

その他に「延期された、留保された」という意味もある。しかしここでは「吊された、ぶらさげられた」という普通の意味にとっておく。

だからこの文は「二つの虚無のあいだで中断された」とも訳せないこともないが、そうすると、時間の流れを前提にしなければならず、その流れと瞬間の前後の虚無とが同じことになるであろうし、また中断ということはたとえ一時的にせよ時間の運動の停止を意味しうるので、はたしてそれによいのかまだ判断できない。ここは虚無のあいだに吊されたというふう位置を指示するものと見ることにしておく。

したがって、このような時間は物理的時間のように、ごく単純に前後関係、つまり順^{オールド}序で示される時間ではなく、意識や心理にかかわる時間であり、また形而上学的な時間であることに留意しなければならぬ。

瞬間を本質とする時間はまた一回かぎりの時間である。しかし時間は何度でも再生が可能である (p. 15) ことはいうまでもない。だが、再生したとき、以前の時間はすでに存在しない。もとの時間がそのまま再生するのではない。「時間は、その持続 *durée* をつくるために、ある瞬間におけるみずからの存在を別の瞬間に移すことはできないであろう」(p. 15)。つまり一個の瞬間は次の瞬間に自己を移すことはできず、瞬間の存在は次の瞬間の到来とともに刹那的に消滅するということを示すのであり、また瞬間は幾何学における点のように本来はその時間的な幅をもたないといえは定義を誇張したことになるであろうか。少くとも時間意識の最少の単位というふう瞬間を理解しておこう。

バッシュールがまず第一に示す瞬間の特質は孤立 *solitude* ということである。「瞬間とはすでに孤立である」(p. 15)。断絶しているということは孤立、孤独として意識される。「それは形而上学的価値(意味)の一番少ない孤立である」(p. 15) という説明が続くので、瞬間そのものもつ形而上学的価値はゼロに近いということになるであろう。持続のような形而上学的価値はないという意味も言外にふくんでいるのかもしれない。

だがこの孤立には別の価値が付加されている。「しかし、もっと感サントイマンタル情的なレベルでの孤立は瞬間の悲劇的隔絶性を明確にする」(p.15)ということが生じる。感情のレベルでいえば、瞬間の孤立性には、どうしても悲痛感ともなうことは否定できない事実であろう。パシュラールはそれを次のようにさらに分析する。「瞬間に局限された時間はいわば創造的暴力によって、われわれを他者たちから孤立させるだけではなく、われわれ自身からも孤立させるからである。それはもっと内密な自己の過去とも断絶するからである。」(p.15)

瞬間がもつ創造的暴力とは、瞬間が強制する断絶、あるいはさらに時間そのものの不可逆性をもつ強制力ともいうような、誰もが好むと好まざるとを問わず服従しなければならぬ強制力をさすのであろう。しかしなぜそれは創造的なのであろうか。これは後にいわれる瞬間の新しさと同関係ではあるまい。瞬間の意識のもつ断絶、孤立の意識はまた新しい瞬間の意識でもあるゆえに創造的のだと考えておこう。

この瞬間性の悲痛感とは、悲劇的という最大級の限定がついている。パシュラールはその理由を他者からの孤立だけではなく、もっとも親密な自己自身からの隔絶、断絶をふくむところに求めている。もっとも安定した自己同一性をこの瞬間がたえず否定するのだとすれば、悲哀は否定された自己をいたむ感情であろう。しかし過去の自己を否定して出現する今の瞬間の自己は、当然のことながら新しい自己であるにちがいない。

次に瞬間の意識は現在の意識であるという特質が考察される。「現在の瞬間と実在(＝現実) [reel] とが完全に等価であることを深く洞察しなければならない」(p.16)。瞬間の意識は過去とも未来とも切り離された時間の意識であるが、それは現在の意識であり、唯一の現実の意識である。しかもそれは実在の意識でもあるという自覚に達しなくてはならないとパシュラールは考えているのである。

「実在レエルであるものは、現在の瞬間の刻印から逃れることがどうしてできようか。それとは逆に、現在の瞬間がどう

して実在の上に自己を刻まないでいられようか。私の存在が、ただ現在の瞬間においてのみ自己を意識するのであれば、現在の瞬間はそこで実在が自己を証明する唯一の領域である、ということはどうして見ないでいられようか」(p.16)。

このように時間の意識を瞬間の意識とするなら、必然的にそれは過去でも未来でもない現在にしか位置づけられず、それは即座にいま現在の意識となるであろう。これは誰しも否定できない実感として受けとめることができる。逆に自己の実在の意識も瞬間の意識のなかにあるといえよう。一切の他者と、あるいは過去の自己とすら絶縁されていて、瞬間を意識する主体の実在の意識は疑いえないものであり、したがって自己の実在の意識がその瞬間に出現するということもできよう。瞬間の意識は、現在の意識であり、自己意識であり、実在の意識であるとして、等号で結ばれていることに留意したい。

何よりも瞬間はここでは人間の意識上の現象であり、また現実感や実在という心理的・形而上学的な問題となっていることは明らかであろう。実在、現在、存在エントル(「人間存在」というものが、瞬間という時間的な点においてその構造を明らかにするように、問題が設定されたのだといえば、かれの主張を先まわりして述べたことになるであろうか。

「たとえその結果われわれが自己の存在を排除すべき事態になろうと、この存在を立証するためには、実際に自己自身を出発点としなければならぬ。それゆえまずわれわれの思考パンセをとりあげてみよう。そうすると思考は、通過する瞬間とともにたえず消えていき、われわれを離れたものについての記憶をもたず、また訪れた瞬間がわれわれに何かを渡してくれる期待もないことを感じるであろう」(p.16)。

バシュアールは自己の意識について反省をこころみ、その思考の運動を対象化しようとするが、どうもこの記述は簡略すぎて、あまりよく分らない。むしろそれは、瞬間の経過を意識することの無益さを強調するための布石にすぎ

ないといえよう。バシュラールはループネルの引用文を示している。

「われわれが意識をもつのは、現在、ひたすら現在についてである。われわれからいま離れ去った瞬間は、一様で巨大な死であり、消滅した世界と燃えつきた天空がそれに属している。そして恐るべき未知の色の瞬間は未来の一面の闇のなかにわれわれに接近する瞬間とともに、まだ海のものとも山のものとも分らないさまざまの世界と天空とを宿している。」(p.16)

ループネルはただ現在の瞬間しか存在しないということを力説しているのであって、それはすでに承認されたことである。

ループネルは「未来と同様過去でもあるこの死のなかには、いかなる段階もない」(p.15)とも述べて、現在の瞬間以外はすべて死として、つまり虚無として、存在をもたないものというふうに一括して考えるが、バシュラールは、むしろ瞬間の孤立性を強調するために、「死のなかにも段階があって、死よりも一層死んでいるもの、それはいままさに消えたものである……とさえるべきであろう」(p.17)と考えている。

また過去の保存や記憶については次のように述べている。

「いま鳴り響いた瞬間を、完全な存在として、その個別性をいかしつつ保存することは、われわれにはできない。完全な思い出をつくるためには、多くの瞬間の記憶が必要である」(p.17)。

この記憶の問題はあとも論じられるけれど、鮮明な記憶は瞬間の記憶であり、時間のなかの前後関係は、他の社会的な事件などとの関連で決定されるように、きわめて間接的なものであるということを、あらかじめ断わっておかねばならない。

瞬間の孤立、断絶、切断ということは、とりもなおさず時間の非連続性を示すことになる。瞬間と瞬間を結ぶ方向

性や瞬間の多数性についてはあとで論じられるけれども、断絶が非連続だということは、接木のイマージュにも当然適用される原理であることを想起しておこう。しかし接木と同じように断絶して非連続的ながら、瞬間も連続することを忘れてはならない。だが瞬間の悲劇性はこの断絶をとくに強調する一面をもっている。

むしろこの悲劇的な特色こそ、瞬間の实在性を示すものだとバシュユールはいう。「存在のこのような断絶^{リュブチェル}のなかに、非連続の観念が異議なく認められるのだ、ということ^{リユブチェル}を力説したいと思う」(p.17-18)。

瞬間の非連続的な連続という、われわれは無数の点の羅列を想像してしまいがちであるが、この瞬間は選ばれた瞬間であると考えねばならない。「われわれが熱意をこめて検討しないような変^{エヴォリュション}遷はみな単調で規則的だということにする」(p.18)と述べるからである。しかしすべての瞬間はよく見れば、そのような選ばれた瞬間となる可能性をそなえている。先ほどの「創造的暴力」を想起しよう。個人の心はそれだけの容量がないから、特殊な瞬間だけを特別扱いすることである。

「もしもわれわれの心 *coeur* が人生を細部にわたって愛するほど広いとすれば、われわれはあらゆる瞬間が贈与者であると同時に略奪者であることに気づくだろう」(p.18)。あらゆる瞬間を万遍なく意識することは現実の人間にとって不可能であるけれども、どの瞬間でも熱意をこめ、真剣に意識されるとき、「贈与者であると同時に掠奪者である」ことに気づくはずであろう。これはまさに「創造的暴力」の別の表現でなくて何であろうか。しかし瞬間は何をあたえるのか、何を奪うのだろうか。瞬間を強烈に意識する状況を考えてみるなら、きわめて緊張した意識によって、前後とは区別され孤立した瞬間というものは、今までにない何かをあたえるのであり、しかもそれはたちまち過去のなかにもち去られることになる、という構造をもつのである。しかしすでに指摘したように、非連続的ながら新しい瞬間が新しい現在と存在と实在の意識をもたらすのであり、そういう意味で瞬間は創造的な面をつねにもつので

ある。創造的暴力とは、瞬間の断絶と非連続と新しさを不可避的に強制する時間の作用を示すことばだと考えなければならぬのである。またそのような瞬間は、熱意にもえた心理状態、緊張した意識状態であることにも留意しておかねばならない。

バシュアールはこの文に続けて次のようにいう。「そしていつも突然に、若々しい新しさあるいは悲劇的な新しさが、∧時間∨とは本質的に非連続であることを、たえず例証していることに気づくであろう」(p.18)。意識された時間、その瞬間が新しい*nouveauté*をもつことも、区別、孤立ということの別の表現だと考えるべきであり、それ如若さとか悲劇的という限定がつくのは、瞬間の贈与の内容によると見るべきであろう。

ここで本節の瞬間の特性を整理しておきたい。

まず時間は瞬間という実在しかもたない。瞬間の第一の特徴は他の位置に移動されることはなく、持続として延長されない、ということである。ひとつの瞬間は次の瞬間には消滅するのである。

瞬間は孤立している。前後つまり過去と未来から断絶している。また外部の他者だけではなく、自己自身の過去とも断絶する。

瞬間は現在しかもたない。

そしてこれらのことは人間がもつ時間の意識が現在の意識、自己存在の意識、実在の意識と等価であることを示すのである。

次に感情のレベルでは、瞬間の孤立性は悲劇的な悲痛感をともなう。その理由は瞬間が次の瞬間に移行されずに消滅するという根本的な断絶が、他者や外界だけにとどまらず親密な自己内面にもおよびからである。これは自己同一

性の危機というバシュエールが用いなかった用語で説明することもできよう。

さらにこの瞬間としての時間は無数の再生が可能である。一個の瞬間は消滅する。しかし別の瞬間が再生することも確実である。注意すべきことは、再生された瞬間が消滅した瞬間とは同一ではないということ、この断絶性を媒介にした非連続的連続ということである。

したがって次の瞬間は必ず新しくなければならない。何かしら相違するもの、区別されるもの、新しいものをもたせなければならぬ。前の瞬間の消滅と次の瞬間の新しさの必然的な関係を、創造的暴力とバシュエールは名づけたのである。

もちろんこれは意識の上での現象であり、現在、實在、自己の存在という要素にも、この創造的暴力は絶対的な力をふるうのである。

瞬間と次の瞬間の関係は無数にくりかえされ、反復される。しかし人間の意識はすべての瞬間をこのように捉えているわけではない。だから実際には特別の瞬間を意識することになる。それは緊張した真剣な意識、熱意をこめて意識が立ちむかう瞬間である。ここに偶然という問題が介入するのだが、それは後でふれるとして、原則的にはどの瞬間もこの特別に選ばれる可能性をもつことだけを指摘する。

すると思いつく、記憶はどうなるのか。瞬間の完全な保存は不可能であるが、「完全な思いつく」は多くの瞬間の記憶を集めることによって可能になるのだ、とバシュエールはいう。瞬間の記憶がいかなる構造をもつかは今後の問題であるが、瞬間が現実、實在、自己の存在の意識であることを想起するならば、存在のなかに記憶装置が組みこまれていることは明らかであろう。

II

ループネルの瞬間という命題は、当然のことながらベルクソンの持続を念頭において主張されたにちがいない。しかしバシュラールはベルクソン批判を正面からはおこなわず、両者の命題を対比することによって、まずループネルの瞬間の特色を浮き出させ、できれば両者の立場を折衷しようとする。ところが折衷的な試みが成功するかに見えながら、これは結局不毛であるとして否定されることになる(p.20)。あらかじめこのことは断っておくべきであろう。ベルクソンの持続観のなかでまったく影をひそめてしまった瞬間の現実性の復権を主張して、「時間についてもっとも直接的な意識に対応する立場はいぜんとしてループネル氏の理論であることが分るのである」(p.20)とバシュラールは述べているからである。

「まずベルクソン氏の立場を研究しよう。」

ベルクソン氏によれば、人びとは持続について内密な直接的経験を^{エラボレ}する。この持続は意識の直接的所与でさえある。おそらく、この持続はつきに同化^{エラボレ}され「^{エラボレ}知的なはたらきによって構成しなおされ」、客観化「^{エラボレ}対象化」され、変形されうるものである。たとえば、物理学者は完全に抽象作業のうちこみ、持続から生命のない、終末も不連続もない画一的な時間すら作りだす。それから彼らは完全に非人間化した時間を数学者に引き渡す。こういう抽象の予言者たちのもとへ入った時間は単純な代数的変数に還元される。とりわけこの変数は以後、実在の性質により可能性の分析にふさわしいものとなる。実際に数学者にとって、連続性は実在のもつ性格であるよりも、純粹な可能性の図式なのである」(p.20—21)。

まず持続が「意識の直接所与」であることの確認。誰でも持続を心のなかで直接経験しているとベルクソンはいう。次にこの持続は知的対象として入念に構成され、対象化される。物理学者は「生命のない、終末も不連続もない時間」を持続から作り、数学者は完全に非人間化した時間を代数的変数にまで還元する。

連続性は可能性の図式^{シエマ}である。

ベルクソンの瞬間の捉え方を次に見よう。

「それでは、ベルクソン氏にとって瞬間とはいったい何であろうか。それはもはや幾何学者の図式的思考を助ける人為的区切りでしかない。知能は生命あるものを追うことが不得意なので、つねに作為的な現在のなかに時間を不動化する。この現在は過去と未来を実際に分離することにすらいたらない純然たる無である。実際、過去はその力を未来にもたらすようである。また未来は過去の力に出口をあたえるために必要であるように見える。そして、唯一で同一の生の躍動が持続を連帯化しているようである。思考は生の断片であり、生に対し思考の規則を指図すべきではない。知能は完全に静的存在、空間的な存在だけを見つめることによって、生成の現実を誤解することのないよう注意すべきである。結局、ベルクソン哲学は過去と未来をほどけないほど固く結びつける。だから時間をその実在性によって捕捉するためには、そのかたまりとして (*l'ans son bloc*) 捉えねばならない。時間は生の躍動の源泉そのものにある。生は瞬間的な挿絵をいくつか受けとめることはありえても、生を説明するのは本当のところ持続である」(p.21)。

つまり瞬間はベルクソンにとってまさに幾何学的な点であり、存在をもたない抽象的な人為的な区切り *coupure* にすぎない。

一方ここでは現在の持続的な時間が提示される。それを知覚するのは意識ではなく知能^{アンテリジャンス}である。(意識と知能の相違はここでは問題にならない) 知能は現在のなかで時間を動かなくする。

この現在は「純然たる無」だといわれる。なぜなら、過去と未来から現在を分離できないからである。逆にいえば現在の時間のうえに過去と未来が重なって、現在が見えないということなのである。要するに時間を「かたまり son bloc」として捉えているのであり、過去と未来を解きほぐせないほど一緒に結びつけているのである。

しかも未来は過去の力の出口のようにも思われ、過去の力が強い。

^{エラン}生の躍動が持続を一体として連動させている。そこに孤立はまったくくない。また断絶もない。瞬間の意識と等価な現在の意識もない。

バシュラールの持続批判はこの特徴に集中する。

「もし瞬間が虚偽の区切りなら、過去と未来を区別することはきわめて困難になろう。両者はつねに人工的に分離されることになるからである。すると持続は分割できないひとつの統一^{ユニテ}として捉えるべきである。そこからベルクソン哲学の結論がすべて生じる。人は自己の行為のそれぞれのなかに、ほんのちよつとした動作のなかに、やりかけたことの完成した特徴を、つまり開始のなかに終末を、胚子の躍動のなかに存在やまた存在のおこなうすべての生成を、捉えることができることになってしまふだろう」(p.22)。

過去と未来を一括して持続とする場合、それはいつ開始するのかという難問が生じてくる。あるいは開始にすでに生成や終結がふくまれているといえるのか。持続の開始をどうすれば設定できるのか。

また過去と未来の連続的な状態がうまく進展しているとしても、「創造的行為がふいに出現する突然変異の領域に身をおくなら、新しい時代はつねにひとつの絶対によって開かれることをどうして理解せずにいられようか」(p.23)。

ベルクソンのいう創造的变化にしても、過去から未来への連続性を途中で区切らずには説明できない。この創造という視点は、瞬間においては新しさ、断絶のあとの新しさというかたちで導入されていた。「あらゆる進化は、その進

化が決定的である度合に依じて創造的瞬間によって区切られている」(p.23)から、瞬間の視点からすれば難なく説明可能である。

ここでまた瞬間に立ちもどってみると、ベルソンのいう躍動エランがもっとも活発なのは、むしろ瞬間においてであるといえるのではないだろうか。意識湧出の瞬間こそもっとも躍動的ではないか。

「創造的瞬間のこの認識を、われわれの意識の湧出以外に確実にみいだせるところがあるか。そこでは生の躍動がもっとも活発ではないだろうか。われわれの眼前で、活動的な現在において、われわれの固有の文化の無数の偶発事、われわれを變革し、創造する無数の企てがくりひろげられるとき、みずからの躍動を多かれ少なかれとり逃がし、その躍動を完成させず、連続さえしなかった目立たない、隠された何らかの潜在力に、なぜ戻ろうとするのだろうか」(p.23)。

このように意識における認識の発生をみ、あるいは新しい認識の努力をおこなう精神エスプリこそ、この瞬間のテーマの中心領域であることが再認識されねばならない。精神を肉体から解放し、もっと自由なものとして精神を考えれば、精神のはたらきが、終始一貫した連続的持続をなすものではなく、はじめから論理的に整合した一元性をもつよりも、偶然性を受け入れ、ジグザグに躍動するものであることが分かり、それを可能にする不連続的な瞬間の価値が見えてくるであろう。

「そこで精神を肉体のきずなという物質的な牢獄から解放するようにしよう。人が精神を解放するや否や、また精神の解放の度合に依じて、精神は無数の偶発事アンシダンを受け入れ、精神の夢の線は無数の頂点に引かれた無数の線分に分断されることに人は気づく。精神は認識の仕事中は明瞭に分離された瞬間をつらねた一本の糸として示される」(p.23—24)。

精神のはたらきは、まずこのように自由なジグザグの方向をとって、決して一方向に集中的に統一されない。認識の仕事はその線分の整合化になる。

「したがって観念論の出発点にもどって、われわれ自身の精神が認識の努力をおこなうことを実験の分野とみなすことを受け入れよう。認識とはとりわけ時間による成果なのである」(p.23)。

それゆえ創造や躍動を認めるためにも、持続とは別に瞬間に対しても独自の存在を認める必要が、どうしても出てくるのである。

「ベルクソンの直観において把握された持続自体について人がどう考えようと、持続とは別に少なくとも瞬間に決定的な実在性を認めるべきである」(p.24)。

しかしそうなれば、「持続のない瞬間によっていかにして持続を構成できるか」(p.24)を示すことが要請されるが、これは次章の大きな課題である。だがもしそれが証明されれば持続が「間接的で媒介的な性質」(p.25)をもつことを結果的に示すことになる。パシュタールは考えている。

もう一度ループネルにもどって瞬間の内容を心理学的に(というのはベルクソンの方法も心理学的なので)考えてみよう。

「われわれが現在についてもつ観念はきわめて充実しており、またとりわけ動かしがたい明証性をもっている。われわれは自己の完全な人格をもって現在に身を置いている。われわれが生存の感覚をもつのは、ただ現在によって、そして現在においてのみである。現在の感情と生の感情のあいだには絶対的同一性 *identité absolue* がある」(p.25)。

すでに述べられたところの瞬間の意識が、とりもなおさず現在の意識であるということが、感情のレベルでも確認されたことになる。意識としても、感覚や感情のレベルでも、現在が中心であり、それが生の意識であり、生の感覚

とも一致するのだと、ループネルとバシュラールは主張するのである。

だから過去や未来によって現在を説明することは見当ちがいであり(p.23)、生の視点から過去を理解しようとするなら、当然現在から過去を見るべきなのである。また持続の感覚もその後で明らかにされる。「持続は他の感覚と同じような感覚であり、また他の感覚と同様に複雑な感覚でもある」(p.23)。このようにバシュラールは持続には瞬間のような特別の第一義的性格はなく、他と同じ二義的な感覚だと断言してはばからないのである。

「われわれに持続を肯定させうるものは何もない。われわれにおいてはすべてが持続の意味と矛盾し、持続の論理を崩壊させる。そればかりか、われわれの本能は理性よりもそのことに通じている。われわれが過去についても感情は否定と破壊の感情である。精神がいわゆる持続に対して認めた信用は、もはや持続が存続せず、またそれに対する信用ももはや存在しないゆえ、預金のない信用なのである」(p.26)。

つぎに瞬間が注意の緊張をともなつて意識されることを中心にして、ベルクソンとループネルの相違点を浮き上らせることにしよう。

「ついでに瞬間の経験における注意の行為 *acte d'attention* の位置を強調しておかねばならない。実際に真の意味で明証的なものは、意志のなかにしかない。つまりそれはひとつの行為を決定するまで緊張している意識のなかにしか存在しないのである」(p.26)。

「この行為のあとで展開される行動は、論理的にもあるいは物理的にも受動的な結果の領域にすでもどっている。

ヘルクソンの哲学は行動の哲学であり、ループネルの哲学は行為の哲学である√というふうに、そこにループネル氏とベルクソン氏の哲学を区別する重要なニュアンスが存在する」(p.27)。

ループネルの哲学は行為の哲学、ベルクソンの哲学は行動の哲学であるといっても、行為と行動の区別はほとんど

どつけがたいけれど、バシュアールは、ここでは意志を中心にした決定までのプロセスを行為とし、それからあとの具体的動作を行動として区別している。人間の内部的なプロセスと外面的プロセスということできようが、かなり微妙なニュアンスをふくむ区別である。

ただ一回かぎりの瞬間ということではなく、人間の行動面における瞬間の考察に移行したことに留意したい。

「ベルクソン氏にとっては、行動とはつねに決断と目的——両方ともいくぶん図式的である——のあいだにおいて連続的展開をみるものであり、つねに独自の現実的な持続である。ループネル氏側の人にとっては、行為は何よりもまず瞬間的な決断であり、また独自性のはたらしのすべてを担っているのはまさにこの決断である」(p.27)。

この瞬間と持続の関係をバシュアールは物理学の力積impulsionと比較したあとで次のようにいう。

「変化する運動——ベルクソン氏がきわめて正当に実在として評価する唯一のもの——は、その運動を開始させる同じ原理にしたがって連続することが分るのであろう。ただ、その展開の不連続性は、行為のあとに続く行動が、意識されることの少ない有機的自動作用にゆだねられる度合に依じて、観察がだんだん困難になる。それゆえ、瞬間を感じるため、意識の明瞭な行為にもどらねばならないのである」(p.27—28)。

そして生が行動のたんなる反復ではなく、受動的に軌道の上を進行することでもなく、瞬間という決意を要する緊張した時間によって構成されていることを明らかにする。前節でふれた強烈な心、選ばれた瞬間である。

「生とは一列に並べられた時の瞬間に強制されたひとつの形態である。しかし生がその最初の実在性をみいだすのはつねにひとつの瞬間においてである。したがって、われわれが心理学的明証性の焦点に立つとき、つまり感覚がつねに単純な意志の行為のつねに複雑な反映か反応にすぎないという点に立つとき、集中した注意が生をただ一個の要素に、孤立した要素に極限するとき、われわれは瞬間が時間の真正正銘の特質であることに気づくのである」(p.28)。

瞬間が緊張であり集中であり凝縮であるとすれば、持続は散漫であり弛緩であり拡散であるし、前者が努力であれば後者は怠惰であるとなろう。時間についての思考でさえ同じことを持続して考えるならやせ細ってしまうのではないか。逆にどんなつまらない考えでも「瞬間の上でそれを凝縮させるなら、精神を輝やかすものとなる。」(p.28—29)

「それでは、行為の本性と、現実的存在である——奇妙な表現だが——と見てはどうしていけないのだろうか。そして次に、生は諸行為の不連続であると見てはどうしていけないのだろうか。この直観をループネル氏とはりわけ明快な用語で示している。△持続は生であると人はいうことができた。そのとおり。しかし、すくなくとも生を含む不連続の枠のなかに、そしてその生を表現する攻撃的な形態のなかに生を置くべきである。生はもはや機能的統一として相互に混合しながら流出する有機的現象のあの連続的流動体ではない。存在は物質的な思い出の奇妙な場であり、自己自体への習慣にはかならない。「人間」存在において恒久的なものでありうるものは不動の恒常的な原因の表現ではなく、捉えがたくしかも終結しない諸結果が並ぶことの表現である。結果のひとつひとつが孤立した土台をもち、それらの結びつき、これはひとつの習慣にはかならないが、その結びつきが個「人」をつくりあげているのである」(p.29)。

バシュアールが認識論研究者として瞬間の非連続的連続にもっとも同感したと思われるのは、偶然事や錯誤や挫折を時間の流れのなかにきちんと位置づけることができるからではないだろうか。ベルクソンの方はこのような障害を無視して歴史をまったく「進化の叙事詩」(p.29)として描くことになった。このような進化の頂点を結ぶ歴史の必要なことをバシュアールも否定はしない。しかし細部にこだわって詳細に見るならば、現実とは別な様相を呈するのである。

「おそらく、ベルクソン氏は進化の叙事詩を書きながら、偶発事を無視しなければならなかった。ループネル氏は

細心な歴史家であり、行動のひとつひとつはどんな単純であろうと、生の生成の連続性を必然的に破ることを無視できなかった。もしひとが、生の歴史を詳細に眺めるなら、他の人びとの人生と同様に、「冗長なくるかえしや時代錯誤や、やりかけの仕事や、挫折や、やりなおしやらで満ち満ちていることに気づくであろう」(p.29—30)。

「ベルクソン氏は偶発事のなかから、生の躍動が分割し、系統樹が多種多様の枝に分岐する革命的行為だけしか取り上げなかった。このようなフレスコの大壁画を描くために、彼は細部を描く必要はなかった。対象を素描する必要がなかったのだといっても同じである。したがって彼はあの印象派的絵画ともいべき『創造的進化』という著作にいたったのである。あの挿絵としての直観は事物の肖像よりもむしろ一人のたましいのイメージである」(p.30)。

ベルクソンの『創造的進化』(一九〇七)は明瞭な対象も細部のデッサンもない大壁画であり、印象派のような作風だという(しかし、もしすべての瞬間を考慮したら本当に歴史が書けるのだろうかという疑問が残るし、一方、たとえば進化の分岐点には、変化が生じ持続を変更させる事件が必ず生じたはずなのに、それをどう解決したのだろうか、という疑問が残るであろう。)歴史的必然をたどるベルクソンに対し、ループネルはむしろ「原理としての偶発事」(p.30)を重視するのである。

「しかし原子を原子によって、細胞を細胞によって、思考を思考によって、事物の歴史を、生物や精神の歴史を記述しようとする哲学者(ループネル)は、結局、事象をばらばらに分離させねばならない。なぜなら事象は行為であり、行為はもし成就していないなら、あるいはうまく成就していないなら、すくなくとも、絶対に発生するという状態でなんとしても開始する必要があるはずだからである。したがって有効な歴史はさまざまの開始するものとともに書かれるべきである。ループネル氏にしたがって原理としての偶発事という理論をたてねばならない」(p.30)。

事後的に組立てられた目的に向って流れるような持続や生の躍動の結果という進化の見方に、バシュラールは根本

的な疑問を呈する。それは緊張を忘れ、自主性を喪って大勢に順応する大衆の歴史に他ならないのではないか。歴史の实体はむしろ偶発事に途迷いながら、試行錯誤をくりかえしつつ蟻のように進むのではないか。

「本当に創造的な進化には一般的法則はただひとつしかない。それはあらゆる進化の試みの根底には偶発事があるということである」(p.30)。

バシュラールはここでベルクソンとループネルの時間意識を図式化して示そうとする。

「ベルクソン氏にとって、時間の真の實在はその持続であり、瞬間はなんの實在性もない抽象にすぎない。つまり瞬間とは、動かない状態に準拠することによってのみ生成を理解しようとする知能が外部からおしつけたものである。こういうわけで、われわれはベルクソンの時間を、一つの黒い直線でかなりうまく表現できるであろう。その場合、一つの無、すなわち架空の空虚として瞬間を象徴化するために白い点をおくことになるだろう。」

ベルクソンの時間、すなわち持続は直線で、あるいは実線で表現され、瞬間は白い点で表現されるとすれば、ループネルの時間はどうであろう。

「一方、ループネル氏にとっては時間の真の現実は一瞬間であり、持続はいかなる絶対的實在性もたない寄せ集めでしかない。それは夢みて再生することを望み、理解しようとはしない記憶、すなわちすぐれた想像の力によって外部からつくられたものである。したがってわれわれはループネルの時間を、まったくの潜在性、可能性の状態にある一本の白い直線によってうまく表現できる。そこに突然まったく予測しえない偶発事として、不透明の實在の象徴として黒い点が記入されることもあろう」(p.31—32)。

ループネルの図式には持続は表明されず、純然たる可能性としての瞬間の非連続の連続を白い直線で表わす。その上に偶発的な現実として黒い点、つまり瞬間をおくのである。

いずれにしてもこの図式は便宜的なものであり、「想像力の術策の域を出ない」(p.32)。ベルクソンの場合、「時間の長さは持続の価値を表わすわけでなく、また拡散的時間から集中的持続へと上昇することが必要であろう。そこにおいても、非連続の命題が難なく適用される。つまり、この集中の度合は、自我が段階的によどみなく豊かになるのと同じほど容易に、意志が照らしだされ、また緊張するところの多数の瞬間によって分析されるのである」(p.32)。

持続における躍動も瞬間に分析することによってもっと容易に理解できるのである。

第二節をまとめると、ループネルとバシュラールのベルクソン持続説批判は、持続が時間をブロックとして捉えるため、まず開始と終結が区別できず、もし開始があるとすれば、その時点で生成や終結までふくまれるということが第一点である。もっと具体的にいえば、過去と未来が現在に対して優位であり、とくに過去が現在を覆い、未来は過去の出口のようなものになっている。

そのため「進化の叙事詩」として系統樹の分岐する革命的行為だけをひろう「創造的進化」観が生じる。歴史における錯誤、挫折、失敗などつまり偶発的事象を無視し、対象の細部、さまざまな偶然を捉えなかつた。(これに対しバシュラールは原理としての偶然を主張)。

ループネルの哲学は行為、ベルクソンの哲学は行動という区別がなりたつ。少くともベルクソンの持続という代数的変数に対し、瞬間も「決定的実在性」を認めるべきである。

図式化すれば、ベルクソンの持続の実線と瞬間の白い点に対し、ループネルの時間は可能性としての白い線であり、その上に偶発的な黒い点として瞬間が示される。

前章でのベルクソンとループネルの時間概念の長所を結びつける折衷の試みは、「瞬間にひとつの次元をあたえ、それ自体にある種の持続を保持しうる一種の時間的原子をつくりだしたい」(p.33) という意図があった。

もっと具体的にいえば「事象はその内部的発展の絶対性からすれば、事象そのものにかかわる論理的な短い歴史をもつはずである」(p.33) から、「事象の発端は事象の外側に起源のある偶発事アランゲンと関係があるとしても、輝き、ついで傾き、そして死滅するためには、どんなに孤立した存在といえども、時間の分け前が当然あたえられるべきだと思つた」(p.33—34)。結局このような考えは「持続が存在の深い直接的な豊かさ」リッユス(p.34) であるという願望にさええられているのだ。したがってこの時間の分け前としての瞬間は「ベルクソンの持続の小さな断片」(p.34) ということになる。瞬間という時間原子の構造は折衷的にはまず断片化された持続となるであろう。

一方ループネルの説から採用したのは、この時間原子である瞬間は相互に融合しないという考え方である。瞬間の存在理由である孤立、新しさを想起しよう。「生成にとって新しさが本質的なものだとするれば、この新しさを時間そのもののせいだとみることによって何もかもうまくいく。存在が画一的な時間のなかで新しいのではなく、瞬間がみずからを更新しつつ存在を自由へと運び、あるいは生成の最初の機会へと運ぶのである」(p.34—35)。

また瞬間は「その攻撃アタックによってみずからを一挙に全面的に認めさせる。瞬間は存在の総合化の因子である」(p.35)。ここで存在の総合という新しい視点が導入される。しかし総合する前に分離していること、隔離する空虚が存在することが必要である。「時間の原子を正確に想像するためには一つの空虚が——それが現実存在しようとしまいと——

必要」(p.35)だということも「二義的」(p.35)なことではあるが想起しておかねばならない。

「したがって生成し発展するために必要な創意とエネルギーをシロエ(の泉)の神秘のなかから汲みあげ、存在が部分的にまた見いだされる行動の核のまわりに時間を凝集させることが有利なように思われた」(p.35)。

このように両論を折衷して、ベルクソンの持続の原子化をおこない、いわば「時間的多元論」(p.35)にバシュユールは帰着する。

しかしたちまちこの折衷論は矛盾をあらわす。直観としてうまく作動しないのだ。「多産な直観はまずその単一性を証明しなければならぬ」(p.35)からである。したがって「考察を展開させた帰着点ではなく、直観の根本において選ぶべきだったのである」(p.36)という反省にいたる。だがなぜ時間的多元論ではいけないのだろうか。その理由の説明はない。

そしてこの到達時点が時間の算術の可能な時点なのである。

「いったいどうして、さきほど足を止めた時間の原子化から、ループネル氏が断固として主張する絶対的な時間の算術化までやってきたのだろうか」(p.36)。

いったい時間の算術化とはそもそも何を意味するのだろうか。「十分に精密にされた瞬間は、アインシュタインの理論のなかでもひとつの絶対である。瞬間にこの絶対の価値をあたえるためには、時間—空間の一点として瞬間を総合的状态で考察すればよい。換言すれば、時間と空間と両方にかかわる総合化として存在を受けとるべきだ」(p.39)。

「存在は場所と現在つまりここ、いま、hic et nuncの交点にある」(p.39)。

まずこういうふうに瞬間を空間と結合して絶対化する操作が完了するならば、このような絶対的な瞬間の相互の関係は、算術的な加減乗除の可能なものになるというのである。

ここではもはや時間は意識だけの問題ではないことは明らかである。その原因のひとつはベルクソンにもある。もちろん彼は主観的な体験のなかで持続をとらえるように要求したが、そこに止まらず、「彼はわれわれが唯一の躍動によって連動し、同一の波によって全員が運ばれることを客観的に証明した」(p.37)。持続の知覚がたんなる主観的な直観であるだけでなく、客観的な持続が対応するのである。

「われわれの持続の感情に、客観的かつ絶対的な持続が対応していることを理解するためには、一個の角砂糖が水の入ったコップのなかで溶けるという簡単な実験を前にするだけでよい」(p.37)。

ベルクソンの狙いは「内的直観の明証性を保持しながら、計測の領域にもどること」(p.37)にあるとバシュラーはあるが、しかし時間の量の領域は、それを研究する方法がいかに間接的であっても、生成の客観性の保護領域であった。したがってこうしたことはすべて持続の原初性、つまり直観的明証性と論証的証明を保護するように思われた」(p.37)。

角砂糖の溶ける客観的時間は、それを早く飲みたいという感情の持続を測る尺度になっている。しかし物理的な時間を問題にするなら、角砂糖の溶解に要する時間と心理的な時間とは何のかわりもない。むしろアインシュタインのいう相対的時間の考えを適用すればもっとその関係は鮮明になる。

「相対性によってアインシュタインの思想がとらえるのは、時間の経過、時間の \wedge 長さ \vee である。この長さは測定の方法に相関的なことが分る。かなりの高速で宇宙空間を往復旅行するとき、旅行中にたざさえた時計の上では数時間しか記録しないとしても、数世紀を経過した地球に帰ってくることになるといわれる。水の入ったコップのなかで角砂糖を溶かすために、ベルクソン氏が固定的で必然的なものとして要請した時間を、われわれの短気さに適合させ

るために必要な旅行はもっと短いはずである」(p.38)。

ベルクソンのように中途半端な客観的現象の利用ではいけない。「運動するシステムにとって時間の経過は以後ひとつの科学的所与となる。この点について科学の教えることを拒否する権利があると考えるなら、砂糖の溶解の実験における物理的条件の介入や、時間と実験変数との実際上の干渉をあえて疑ってみなければなるまい。たとえば、この溶解実験が温度に関係するというところに誰でも同意するだろうか。ところが現代科学にとって、この実験は時間の相対性にもまた関係している。ひとは科学にその分け前をあたえていない。科学全体をとりあげなければならない」(p.38—39)。

ベルクソンの出した持続の外部的証明となるものは、「事象の オルディナション 配列の明快な原理」としての唯一の持続の証明でもあったわけだが、これが相対性の原理のもとにあえなく崩れてしまった、とバッシュラールは考える。「世界は意識の内奥で体験される人びとの個人的持続のために コンヴェルジャンス 収束する保証を——少なくとも直接的には——提供しない」(p.39)。

要するに、空間中の異なった点にある二つの事象の同時性を明白なものとすることはできない。それを成立させるためには「静止したエーテル ether fixe」のようなものによって結ばれているとでも考えねばならないが、マイケルソンの実験の否定的な結果によって、それは不可能なことが分っている(p.36)。異った場所の同時性は「間接的に規定する」(p.40)ことが必要であり、「異なった瞬間を区別する持続の尺度を、同時性かつねに相関的なこの規定に、適合させねばならない」(p.40)のである。

それに対し、瞬間は空間の一地点と結合させれば、絶対的なものとして止まる。それはここから *hic et nunc* という時間と空間の交点であって、「ここと明日とか、あそこと今日」(p.39)という組合せではいけない。もしこ

した組合せをおこなうなら、持続や空間の軸上に拡大されて、相対的なものになってしまう。「しかしこの二つの副詞（「ここといま」）を結合し、融合させることを認めるやいなや、動詞…であるêtreはついにその絶対の力を受けるのである」（p.40）。

この場とこの瞬間における同時性には疑いえない明証性がある。「そこでの継起は完璧に曖昧さなしに整然とおこなわれる」（p.40）。瞬間は「正確で客観的なものとして示され、そこに安定と絶対のしるしをわれわれは感じる」（p.41）のである。

一方、持続は、どんなに手をつくしても克服できない異質性エテロジエネイテを含んでいる。どうしても純粹持続にはいたらない。それができないのは自分の能力が劣っているせいだと反省し、また努力を重ねたが、しかしベルクソンのいうような飛躍や生成にはいたらなかったとバシュラールはいう。

「スピノザが存在の考察から汲みあげた単子エレマンに匹敵するほど、明快で整合的な要素の生成について、何度われわれは探求をおこなったことか」（p.42）。

生の躍動が生成を示す偉大な線を、自分のなかにどうしても見つけられないので、だんだんその線を断片化し広がりませばめて「持続の同質性」を求めることにした。

「しかしこの探求はつねに同一の失敗に帰した。持続は持続するだけにとどまらず、それは生きていたからである。当の持続の断片をどんなに小さくしても、顕微鏡的に検討すれば、事象の多様性を読みとることができた。そこにあるのは、いつも布地ではなく刺繍の模様であり、つねに小川の動く鏡の上の影と反映であって、決して清澄な波ではないのである」（p.42）。

バシュラールが持続を真摯に追体験しようとする苦しいことは、ここからも十分読みとれるであろう。たんに理論的

に反撃するのではなく、その前に柔軟に理解の努力をかさね、その結果としての否定的な結論であることが分る。

「持続は実シュプスタンス体と同様に、われわれに幻影をあたえるだけである。持続と実体とは、どうしようもない换位命題として、お互にだまされた嘘つきの寓話を演じるのである。生成とは実体の現象であり、実体とは生成の現象である」
(p.42—43)。

この実体が何の説明もなく登場させられ、しかもまったく価値をおとしめられた意味で使用されていることに、注意しなければならぬ。かつて『水と夢』の研究において筆者が指摘した実体と、まったく同じ内容をもっていると見てよいであろう。持続が「実体」化されて、さまざまな価値の受容体となっていることに、バシュラールはひそかに警告を発しているのである。生成もまた実体化された持続から派生する現象にすぎない、とその仮構性を指摘したので。

バシュラールは次にベルクソンの記憶の理論についても、時間の直接的な経験が持続ではなく、瞬間であり、持続の記憶がもつとも持続性にとぼしいという。「ひとは……であったということは思い出すが、持続したことは思い出さない。時間のなかの遠ざかりは持続の見方ベルクソンを變形する。ちょうど空間の遠ざかりが長さの見方を變形するのと同じである、なぜなら持続はつねに視点に左右されるからである。それにしても、ベルクソン哲学のいう純粋な思い出とは、孤立してとらえられたイメージ以外の何物でもあるまい」(p.44)。

記憶によっておこなわれる思い出の「時間的位置づけ」(p.44)にしても、純然たる個人的なものではありえず、外的な根拠、あるいは社会的な枠組にたよらざるをえないことは、少しでも過去の記憶を位置づけてみようとするれば、誰にも容易に分るであろう。バシュラールはアルプヴァクスHalbwachs(一八七七一—一九四五)の「記憶の社会的枠組」の説を援用しつついう。

「われわれの思索は堅固な心理的横糸をもたない。それは死んだ持続の骨格であり、もしそれがあれば、自分の意識だけで、よびもどされた思い出の場所を決定するのが自然にまた心理的にできるであらう。だが実は、われわれは自分自身の年代記を学習し、学びなおす必要を感じているし、またこの学習のため、この上なく偶発的なことを年代の一致によって集め要約したにすぎない一覧表のたすけをかりるのである」(p.44-45)。

「自分自身の年代記を学習する」ということは、具体的にいえば、内的な個人的な事件を客観的に位置づける心理的な基盤は見あたらず、なんらかの社会的枠組にたよらざるをえないということである。これはもちろん二つの事象の同時性とは次元のちがう問題である。

「もし人びとが現代の歴史にあまり注意していなければ、自己自身の歴史をよく知らないということになるだろうし、少くとも自分自身の歴史には、多くの時代錯誤があることになるだろう」(p.45)。

このことはもっと具体的に次のように述べられる。個人の過去の歴史をたんに想起しても、前後関係が正確に決定できず、どうしても外部の事件、社会的、歴史的な事件を道標のように役だてながら、位置づけをおこなわざるをえない。そしてそこから、記憶が持続を保持しないという結論に導かれることに注意しよう。

「われわれが心情の運命を賭けたような内密な思い出を、迅速正確に位置づけるのは、共和国の大統領選挙といったようなつまらない選挙「の日付」によるのである。しかし思い出の位置決定が間接的になされるのは明らかであり、精密にしようとする、内的な生のもっとも遠く離れた領域まで参照項目をふやさねばならないとすれば、そのことは死滅した持続の最小の痕跡さえ、われわれが保存しなかったことを、証明しているのではないだろうか。記憶という時間の番人は瞬間しか保存しない。記憶は持続という複雑で人為的な感^{サンクション}覚については、絶対に保存しないのである」(p.45)。

バシュアールは記憶のあと、意志と注意（つまり「知能の意志」）（p.45）の心理学においても持続が間接的であつて、瞬間がより一義的であることを検討する。

まず注意attentionの持続を考えてみよう。いったい自己の上にどれだけ注意を向けられるだろうか。「個人的に
いって筆者は、あらわにされた自我が表象するこの観念的な無の上に、注意を長く固定できないので、注意という行為のリズムにのつて、持続を破らざるをえなかつた」（p.46）と告白している。意識、あるいは知能の意志としての注意は、むしろごく敏捷に動くことにその特色があるので、長く固定されることは本性に反することなのであろう。ただこのように反省的な考察の結果、バシュアールは次のような新しい発見にいたる。

「そしてそこでまた、予想しがたいものが、最小な状態に正面から向きあい、純粹で無垢な内密さの領域を見いだそうとつとめながら、自己自身に向けられたこの注意が、みずから機能として、歴史のない思考、思考群のない思考という、あの甘美で繊細な新しさをもたらすことに、突如として気づいたのである」（p.46）。

いわば現象学的な反省ともいいたいような記述は、デカルトのコギトの秘められた一面の発見にいたるだけに、バシュアールの気迫が感じられる。

「デカルトのコギトに全面的に集約されるこのような思考は持続しない。その明証性は、思考の瞬間性という特色によつてのみ保証されるのであり、思考が空虚でありまた孤独であるからこそ、思考そのものについての明快な意識がもてるのである」（p.46）。

思考が自己自体を思考するとき、思考以外のものがその対象でないから、それは空虚であり、孤独でもある。それはただ一瞬のひらめきであり、長く続くことはない。デカルトがコギトによつて「われあり」という自覚をもつたのも、この一瞬の反省によるのだという発見を、バシュアールはやがて『ノンの哲学』においてさらに深めて、非デカ

ル卜的な認識に突入する。そのとき、コギトのゆるぎない主体の同一性が疑われ、「われ知覚する、ゆえにわれあり」、固い蠟を知覚するわれは、軟らかい蠟を知覚するわれとは同じではない、というふうには知覚の対象とともに変化する主体という展開をとげる。しかしここではまだそこまではいかない。

「このとき思考は思考の無にすぎない持続、したがって効果的な無のなかで世界の攻撃を待つ。世界は思考にひとつの認識をもたらすが、注意深い意識が客観的認識によって豊かになるのは、依然として多産な瞬間においてなのである」(p.46)。

注意は瞬間的にはたらくが、それで終りではなく、また次の瞬間か、あるいはそのあとで、また同じ対象に向うことをさまたげるものはない。だから「注意はまた一連の開始であり、時間が瞬間をしるしづけるときに、意識にもどる精神が、くりかえし再生されることによって、注意がつくりだされるのである」(p.47)。

「さらに、注意が決定となるような、あの狭い領域にもし検討を進めることができれば、動機の明証性と行為の喜びとが集中していく意志のなかに、ピカリと輝くものがあることが分るにちがいない。そのときはじめて本来の瞬間的条件について語りうるであろう。その条件は厳密に言えば予備的なものであり、せいぜい始まりに先だつもの *pro-initialis* である。というのは、それは幾何学者が運動の最初の条件とよぶものに、先立つものだからである。しかもその場合、この条件は形而上学的に瞬間的なのであって、抽象的に瞬間的のではない」(p.47)。

おそらくこの予備的注意、始まり以前の意識の緊張状態は、のちに非現実機能として考察される心的状態とも関連するのであろうが、非現実機能は、注意よりもっと弛緩した夢想に近いのだから、この条件は注意の一手手前の段階なのであろう。

バシュナールは例をあげる。

「待ち伏せしている猫を眺めてみよう。そうすれば悪の瞬間 *instant du mal* が実在するものなかに登録されていることが分るのであろう。そこからベルクソン主義者なら、持続について彼がおこなう検討がどんなに狭かろうと、悪の軌道 *trajectoire du mal* をつねに考えることになるはずである。もちろん跳躍が開始されて、物理学的、生理学的な法則、複雑な集合体を規制する法則と一致するような、ひとつの持続が展開される。しかしこの跳躍の複雑なプロセスに先立って、決定のための単純で犯罪的な瞬間が存在していたのである」(p.47)。

バシュラールは注意が決定となるような瞬間が、日常生活においては決して合理的で必然的な原理にもとづいてなされるのではなく、つねに「偶然の一致」から生じることを力説し、注意や思考の始動には新しさが必要であり、また意識や生の前進にも新しさが不可欠であることから、持続ではなく新しさの原理である瞬間の必然性に光をあてるのである。

最後に時間と空間の交点において、意志、明証性、注意の心理学がもっともよく分析できるはずだが、残念ながら哲学用語がまだ相対論を同化しておらず、同化吸収は始められたものの完成にはほど遠い、とバシュラールはいう。空間的原子論と時間的原子論の融合もこの方向であらう。

「空間—時間—意識の複合、それは三要素の原子論であり、いうなれば、事物との交流も、過去との交流も、他者の魂との交流もない三重の孤独のなかで顕現されたモナドである」(p.48—49)。

しかし結局、心理学の領域はこの時間的な形而上学的研究にとってあまり適切な領域ではないとバシュラールはいう。

バシュラールは本節の終りにループネルにおける時間の直観の主張を特徴づけて次のようにいう。

「一。時間の絶対に非連続的特性。

二。瞬間の絶対に点的特性。

したがって、ループネル氏の命題は、時間についてもっとも自由な算術化を実現する。持続とはその単位が瞬間であるようなひとつの数にはかならない」(p. 49—50)。

こうしてバシュアールのいう算術化がやっと明快になる。しかしこの場合の瞬間は空間との交点なのかどうかは判然としない。

第三節での大きな主題は、前節での折衷が挫折した理由を反省し、ベルクソンが提示した物理的な持続の例を、相対性理論によって正面から打破し、「このこといま」という空間—時間の交点に瞬間を位置させれば、絶対的な存在であると主張する。持続はいわば前科学的精神の信じた実体にすぎない。

一方、時間は偶然であり、不動の瞬間の経験が単純で強力で恒久的である。持続は記憶にはとどまらず、記憶の位置決定は直接的には困難で、外部の社会的枠組にたよらざるをえず、結局、記憶もまた瞬間しか保持しないのである。

こうして瞬間を中心として、空間—時間—意識という複合的な三重のモナドを構想し、それは時間的には絶対に非連続であり、瞬間として絶対に断絶している時間の直観だということになる。持続はしたがって瞬間を単位とする数として考えればよいことになる。

(第一章にはあと三節あるのだが、紙幅の都合で次回にまわすことにしたい。)

注

- (1) 「バシュラールの物質的想像力における切断と連続——接木という概念装置をめぐって——」茨城大学人文学部紀要「人文学科論集」第二〇号、昭和六十二年三月
- (2) Gaston Bachelard, *L'intuition de l'instant, Etudes sur la Sîloé de Gaston Roupnel*, Paris, Stock, 1932. (引用は本書による)
- Nouvelle Edition, *suivie de Introduction à la poésie de Bachelard* par Jean Lescur, Paris, Gonthier, 1971. (Bibliothèque Médiations).
- わたしが気のついたテクストの相違は、一九三二年版三六六ページ。
〈en gardant le contact avec la thèse bergsonienne, nous voulions mettre la durée dans l'essence même du temps.〉という文章の下線の部分が「メディアアクション新書」版二八ページでは「espace」となっている。一応訳文をつけておこう。「ベルクソンの命題と接触を保ちながら、われわれは持続を時間の本質そのもののなかに置こうとした」ということが、「持続を時間の空間そのもののなかに置こうとした」となる。実はこの文で、ベルクソン主義との折衷の試みが袋小路に入っただことを反省して、「形而上学的本体の間違った概念」を反省し、そして前記引用文がくるのであるが、持続を時間の本質とすることを、持続を時間の空間とすると変更したとすれば、かなり大胆な表現となると思われる。もちろんたんなる誤植ではないかとも考えられるので、ここでは異同を指摘するにとどめたい。
- (3) Gaston Roupnel (一八七一一一九四六) デイジョン大学教授。『一七世紀デイジョン地方の町と田園』(一九二二)、『フランス田園史』(一九三二)。「シロエ」(一九二七)、『歴史と運命』(一九四三)、『新シロエ』(一九四五)などがある。なおシロエSîloéとはエルサレムある伝説的な池の名で、『ヨハネ伝』によれば生れつきの盲人をいやすとされるシロアムのこと。シロアムとは「遺わされた者」という意味である。
- (4) …Le temps est une réalité resserrée sur l'instant et suspendue entre deux néants.
- (5) 拙論「バシュラール『水と夢』における「実体」の問題」、茨城大学人文学部紀要(人文学科論集)第十六号